

第2部 記念講演

ア 能勢初枝氏のプロフィールと著書紹介



- 1935年 岡山市生まれ
岡山県立操山高校卒業
- 1958年 奈良女子大学文学部国語国文科卒業、卒業後上京
- 1976年 高槻市（真上町）に居住
- 2001年 『ある遺書—北摂能勢に残るもうひとつの平家物語』 著作・出版
- 2004年 『右近再考—高山右近を知っていますか』 著作・出版
- 2007年 『歴史回廊—歩いて知る高槻』 槻歩クラブとの共著・出版
- 2009年 岡山市に転居
- 2010年 岡山歴史研究会入会

2011年 会報『歴研おかやま』の編集に参加

2011年 『ある遺書—北摂能勢の安徳天皇伝承』（再版） 著作・出版

著書『ある遺書—北摂能勢の安徳天皇伝承』

安徳天皇が、壇の浦で入水しなかったということは、各資料から、広く信じられています。そのためか、安徳天皇潜幸伝説は各地に残っています。ただ、古文書（遺書）として発見されているのは大阪府能勢町のものであります。

十年前、この遺書のことを知って、『ある遺書—北摂能勢に残るもう一つの平家物語』を自费出版しました。そのころ、私は大阪の高槻に住んでいましたが、友人知人の協力で五百部がすぐに完売しました。

最近になって、その本がインターネット上で、高値で取引されている事を教えられ、ぜひもう一度出すようにすすめられました。NHK大河ドラマが「平清盛」ということもあるので、副題を「安徳天皇伝承」と変えて思い切って自费で再版しました。

藤原経房の遺書—安徳天皇伝承—

江戸末期の文化14年、摂津能勢（現大阪府豊野郡能勢町）の民家の屋根裏から発見された古文書は、平安の貴族藤原経房が息子にあてた遺書だった。そこには壇の浦から安徳天皇を守って山里能勢まで逃れて来たこと、そして天皇はこの地で亡くなられたことが書いてあった。

発見当初から真偽に議論はあったが結論は出ないまま今日に至っている。

いま遺書の内容に新たな光を当ててみると驚くべき事実が見えて来た。

『平家物語』などと照らしあわせながら、遺書の真実を問う。

『ある遺書—北摂能勢の安徳天皇伝承』

能勢 初枝著 A4版 226ページ 定価 1,200円＋税
 著者連絡先 〒703-8238 岡山市中区住吉町1-1-401（住吉ビル）
 TEL/FAX 086-237-0681 e-mail k_nose@wb3.so-net.ne.jp
 氏名 能勢 初枝 (NOSE HATSUE)
 申込は TEL・FAX・e-mail で申してください

イ 記念講演レジメ（講師・能勢初枝）

もう一つの平家物語—安徳天皇は生きていた—

能勢初枝 著『ある遺書—北摂能勢の安徳天皇伝承』より

『ある遺書』とは…

〈発見〉 江戸末期の文化14年（¹⁸¹⁷1817年）、能勢町（大阪府）の辻勘兵衛宅の屋根裏から。

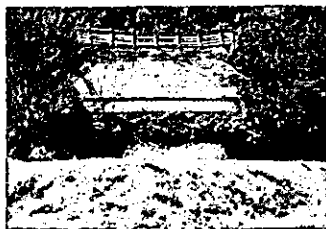
〈内容〉 藤原経房（^{つねふさ}従四位上侍従行左少弁）という公家が息子の^{さこまる}左古麿に当てて書いた遺書。

源平合戦の壇の浦から、二位の尼（平時子）の命によって、安徳天皇を奉じて能勢の里まで逃げて来たが、幼帝は翌年この地で崩御された。ともに従ってきた「源のすけ」と夫婦になり陵墓を守ってきた。建保5年（1217）、源すけ55歳で死亡が遺書を書くきっかけになった。

発見当時、江戸や京・上方の学者・文人の間でおおいに注目されたが、真贋の結論はでないまま、次第に忘れられていった。その後も個人的に興味を持った人はいたようだが、本などにはなっていない。

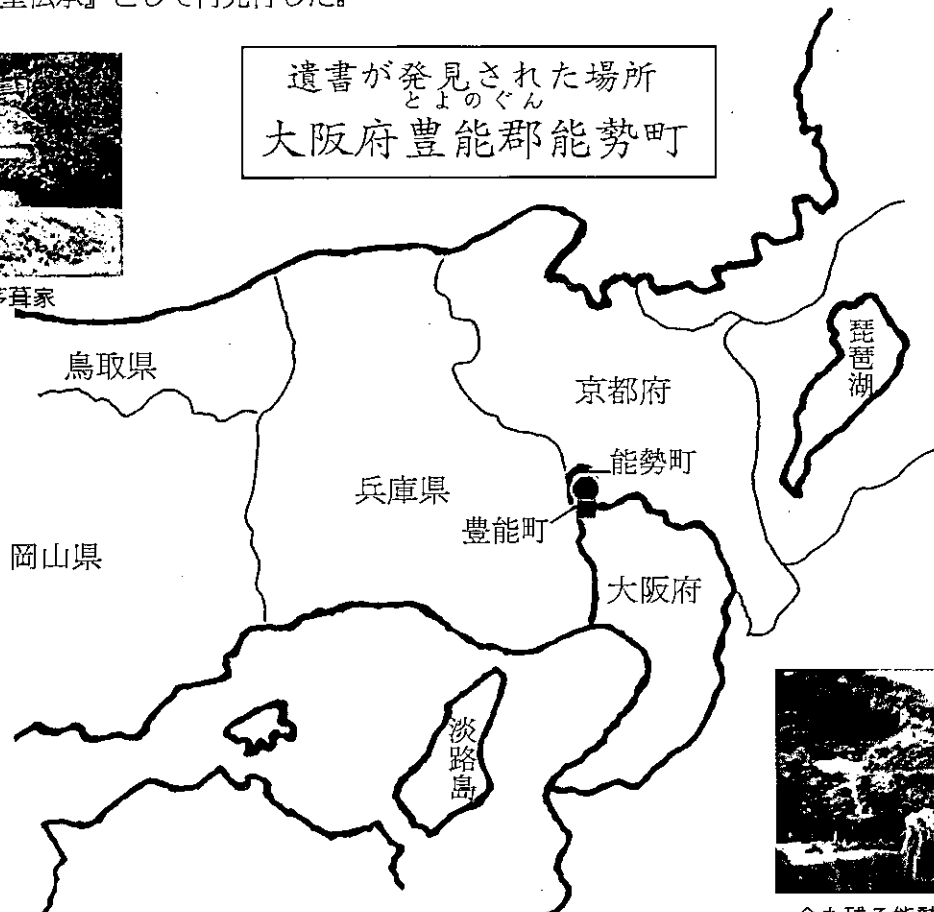
昭和の末になって、能勢町の郷土史研究家たちが調査研究し、「能勢に潜幸された安徳天皇」（平成4年）を出版。それを知った筆者が『ある遺書—もう一つの平家物語』として平成13年、自費出版した。

その本がネット上で取り引きされていることを教えられて、10年後になる昨年、再び『ある遺書—北摂能勢の安徳天皇伝承』として再発行した。



今も残る能勢の茅葺家

遺書が発見された場所
とよのぐん
大阪府豊能郡能勢町



今も残る能勢の茅葺家

元永元年 1116年 諸国凶作、京都に盗賊起り平正盛討つ（年表）
 大治四年 1129年 平忠盛、瀬戸内海の家賊退治（年表）
 保延元年 1135年 再度、平忠盛 瀬戸内海の家賊を討つ（年表）
 保延二年 1136年 諸国凶作、児を棄てるもの多し（年表）
 保延四年 1138年 京都に大火（年表）
 久安二年 1146年 清盛安芸守
 保元元年 1156年 保元の乱
 平治元年 1159年 平治の乱 源頼朝 伊豆に流される
 仁安元年 1166年 京都の大火 1000余戸焼失（年表）
 仁安二年 1167年 平清盛 太政大臣
 仁安三年 1168年 京都の大火 3000余戸焼失（年表）
 永安元年 1171年 平徳子 高倉天皇の中宮として入内
 安元元年 1175年 安元の大火・つじ風
 ※「去ぬる安元三年四月廿八日とかや。風激しく吹きて」みやこの東南からの火が燃え移り、京の三分の一が灰燼と化した。公卿の家ばかりか、朱雀門、大極殿、大学寮、民部省などまで焼けて落ちた。人々は逃げまどい、「煙にむせびて倒れふし、或はほのほにまぎれてたちまちに死ぬ。」という惨劇だった。
 治承元年 1177年 鹿ヶ谷の謀議
 治承三年 1179年 言仁親王3才で即位（安徳天皇）／後白河法王幽閉

治承四年 1180年 大いなるつじ風／南都焼失／福原遷都／以仁王挙兵

※「治承四年卯月のころ、中御門京極のほどより大きなつじ風おこりて、六条わたりまで吹けることはべりき。」家々は大小にかかわらず、すべて壊れ「桁・柱ばかり残れるもあり」、また家だけではなく、怪我をしたり、火傷をした人は数えきれない。つじ風はよく吹くけれど、この時ばかりは「ただ事にあらず。」
 ※「治承四年みな月のころ、にはかにみやこうつり侍りき。」人々は移転のため、家を壊して淀に流し、あとの地は島になってしまった。しかし移転先の福原は土地も少なく、地は海に向かって傾斜していて、糸里もできない。結局、再び京都へ帰ったが、「古京はすでに荒れて新都はいまだならず。」荒れた京に住いはない。

養和元年 1181年 清盛死す／凶作、大飢饉 疫病蔓延

※「養和のころとか、久くなりておぼえず。二年があいだ世の中飢渴して、あさましき事侍りき。」飢えた人々は乞食になって、物乞いをして歩く。翌年は疫病が流行って、「世人みな病死」し、幼い子が、死んだ母親の乳をすいながら倒れている様子も方々で見られた。京中に死臭が満ち、仁和寺の隆暁法印という僧が、亡くなった人の額に阿字を書き供養してまわったが、その数四萬二千三百あまりだった。

寿永二年 1183年 二、三年つづきで飢饉・疫病

々 平家 安徳天皇を奉じて西海に逃れる

元暦元年 1184年 大なる（大地震）M7.4 おこる

※「また同じころかよ、おびただしくおほなるふること侍き。」文徳天皇のころにも、大地震で東大寺の仏像の首が落ちたと聞いていたが、この度の地震はふつうではなかった。山はくずれて河を埋め、海はかたぶいて陸地を干しあげた。地面は裂けて水が吹き出す。渚に繋いでいた船は波に流されて漂う。家にいた人は押しつぶされ、外へ走り出ると、地面が裂ける。京の神社仏閣、塔も廟も被害を受けないものはなかった。このような激しい揺れは間もなくおさまったが、余震はしばらく続いて、日に二三十回揺れない日はなかった。人々は、しばらくは被害のことを話したが、月日が経つ内に言葉に出して云う人もなくなった。

文治元年 1185年 平家滅亡

（建保四年 1216年 鴨長明死亡 建保五年 1217年 藤原経房遺書を書く）

『経房の遺書』——入水したのは身代り、『平家物語』——それを暗示する

『藤原経房の遺書』より「壇の浦」

略 あやしの小ぶねに入身をやつして、その心かまへてしおりぬ。主上・典内侍・経房・種長うちりて磯へ漕、またの小ぶねに女院・大納言〔佐〕・勾当内侍・阿波内侍・基道・景家のりてこなたへこぐ。あひは廿段ばかりも有ぬらん、磯には源氏いくらとなく、船にも陸にもるあまりてのがれはつべくもなし、一門の人々、あるはうたれ海にもしづみ給ひしに、二位殿ハ知盛(卿)のこの御子にミそつけて、略 御劔めきたるものを持たせ給ひ海に入給ふ。見るに心も消え、闇よりやみにたどるこちして、かたきもミかたも涙のこゑをのミて、略 かづきあげ奉らんとさわぐ。

訳文

粗末な小舟にみんな身なりも変えて、覚悟して乗っていた。安徳天皇、典侍、私経房、原田種長が乗って岸に向つて漕ぐ。もう一つの小舟には建礼門院、大納言、勾当内侍、阿波内侍が乗って向こうへ漕ぐ。間は二百米もあつたろうか。岸辺には源氏の兵が無数にいる、また船にも岸にも大変沢山いて、とても逃れ切ることにはできない。平家二門の人々は、あるいは討たれ、またあるいは海に沈まれた。二位殿は、知盛卿の二番目のお子様にお子様に衣装をお着せになつて、略 御劔らしいものを持たせて、海にお入りになつた。それを見たものは、敵も味方もみな嗚咽をこらえて引き上げようと騒ぐ。

当時の主な資料が伝える安徳天皇生存説

吾妻鏡 (鎌倉方の歴史書)「安察局、先帝を抱き奉りて入水すと

二云えども存命す」

玉葉 (当時の関白九条兼美の日記)「主上のことは分明ならず」
醍醐雑事記 (醍醐寺の僧侶慶延が様々な事象を集録)

「先帝行方知れず」

御陵参考地

安徳天皇の陵墓

薩摩疏黄島

赤間神宮阿弥陀寺 (長門下関)

因幡岡益の石堂

対馬厳原の宗家廟

阿波粗谷山



赤間神宮阿弥陀寺山門

『平家物語 卷十一』より「先帝身投」

(略) 主上ことし八歳にならせ給へども、御年のほどよりはるかにねびさせ給ひて、御かたちうつくしく、あたりもてりかがやくばかり也。御ぐし黒うゆらゆらとして、御せなかずぎさせ給へり。(略)

「尼せ、われをばいづちへぐしてゆかんとするぞ」(略)「極楽浄土とてめでたき処へぐしまいらせさぶらふぞ」と、なくなく申させ給ひければ、山鳩色の御衣にびんづらゆはせ給て、御涙におぼれ、ちいさくうつくしき御手をあわせ、まづ東をふしをがみ、(略) 二位殿やがていだき奉り、(略) ちひろの底へぞいり給ふ。悲哉、無常の春の風、忽ちに花の御姿をちらし…
訳文

(略) 安徳天皇は今年八歳におなりですが、御年よりは、ずっと大人びていらつしゃつて、そのお姿が美しくあたりも照り輝くようです。御髪も黒くゆらゆらと、御背中を過ぎるほどです。(略)

「ばよ、われをどこへつれて行く」(略)「極楽浄土といつて、ありがたいところへお連れたいします」と泣きながらおっしゃれば、山鳩色の御着物にびんづら(幼児の髪型)をお結いになつた帝は、小さくかわいらしい御手をあわせ、まづ東に向つておじぎをなさり、(略)

二位殿がやがて抱きあげられて、(略) 深い海の底へ沈んでしまわれました。ああ悲しいこと、無情の春の風が、たちまち帝の美しい御姿を消して(略)

平家滅亡の壇の浦合戦の日、文治元年(1185) 3月24日

安徳天皇浦は満6歳4か月

治承二年(1178) 11月12日誕生

大人びた安徳天皇画像

みづら例

聖徳太子二皇子像



安徳天皇の遺品を納めた能勢の八幡社入口

「添え書き」から分かる天井裏に隠した理由

天正十年(1583)本能寺の變
 天正十六年(1588)秀吉 刀狩
 同年 領主能勢頼次、攻められて敗走、
 備前の法華宗妙勝寺に匿まれる
 文祿三年(1594) 太閤檢地
 当主経一は、親戚の二人の名前も入れ
 て慌てて隠す。

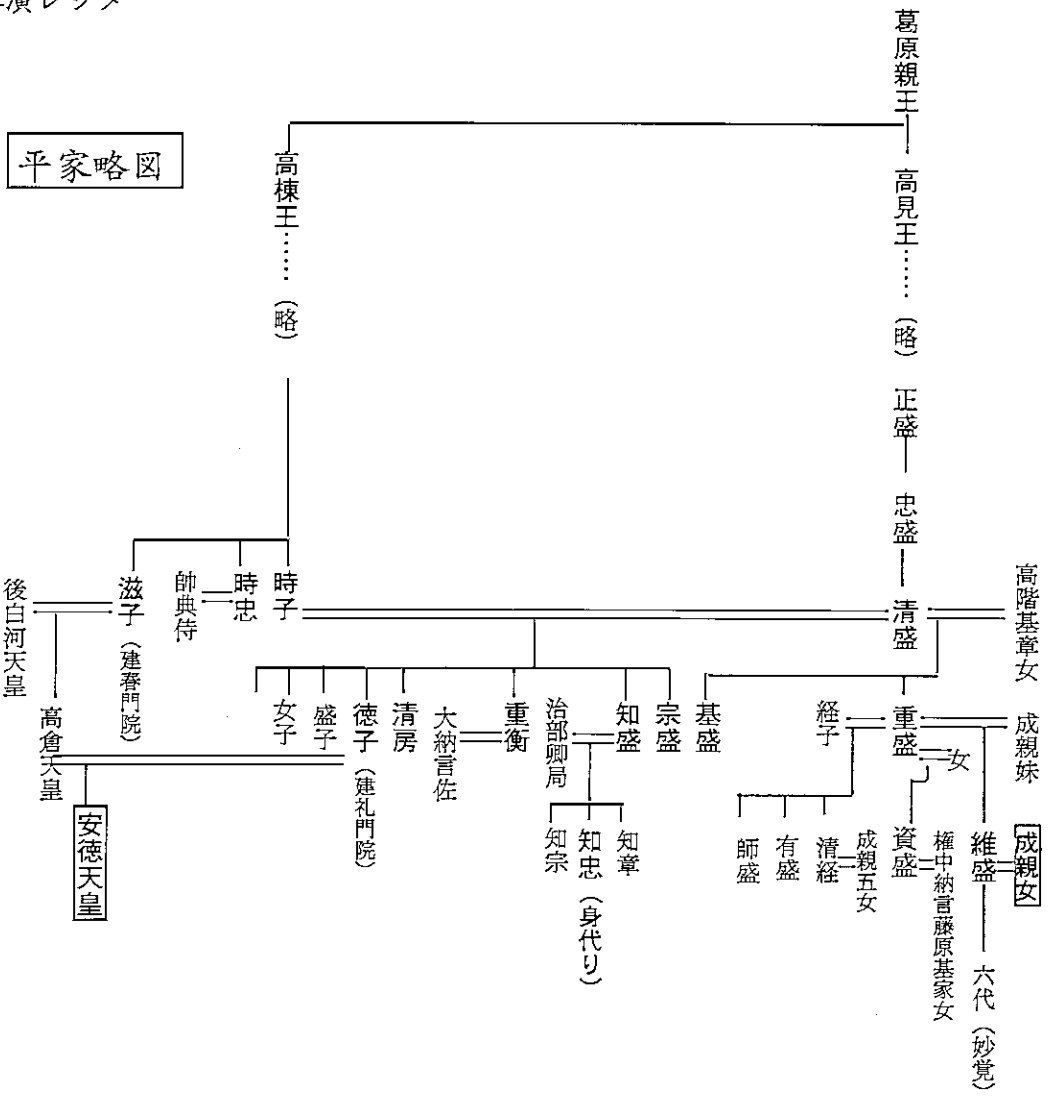
経實	左近(左古磨)	行年八十三才	文永八年未三月二日	(一二七一)年
経久	勘解由	行年七十七才	延慶元年申十一月十八日	(一三〇八)
経冬	勘太	五拾七才	延慶二酉年十月十三日	(一三〇九)
恒助	中六	九十一才	永和四年歳	(一三七八)
助実	介三	行年七十一才	応永六年巳卯八月十二日	(一三九九)
経成	常七	永亨九年巳三月二十九日		(一四三七)
成実	右衛門	四十三才	長祿二寅五月	(一四五八)
経吉	吉右衛門	六十九才	永正十五年寅五月	(一五一八)
経弥	弥左衛門	七十四才	永祿五戌三月	(一五六二)
経春	勘兵衛	六十三才	文祿二亥四月十五日	(一五九三)
経一	市郎兵衛			
経忠	下辻忠左衛門弥左衛門弟	永祿元年午十一月三日	六十八才	(一五丑年の五月五日五八)
経久	久右衛門	天正十五年四月十八日	五十二才	(一五八七)

遺書の登場人物のうち、「源のすけ」を特定する

遺書の冒頭「ことし建保五年丑ふつき五日二源のすけミまかり給へり」(今年建保五年五月五日に源のすけがお亡くなりになった)とある。
 「すけ」とは、典侍のこと。典侍は内侍司何百人かの内の二番目の位の女房。当時、典侍は二、四人で、父親または夫が三位以上、大納言など高位高官の娘に限られた。この時代、典侍になれるのは、平家公達の子女。ただし、典侍として『平家物語』中に出ているのは、大納言局佐(典侍・重衡の室)と帥典侍(平時忠の室)の二人だけ、しかし他にも典侍がいた。
 考えられるのは、年令その他から維盛の妻か資盛の妻しかない。(次ページの平家系図参照)

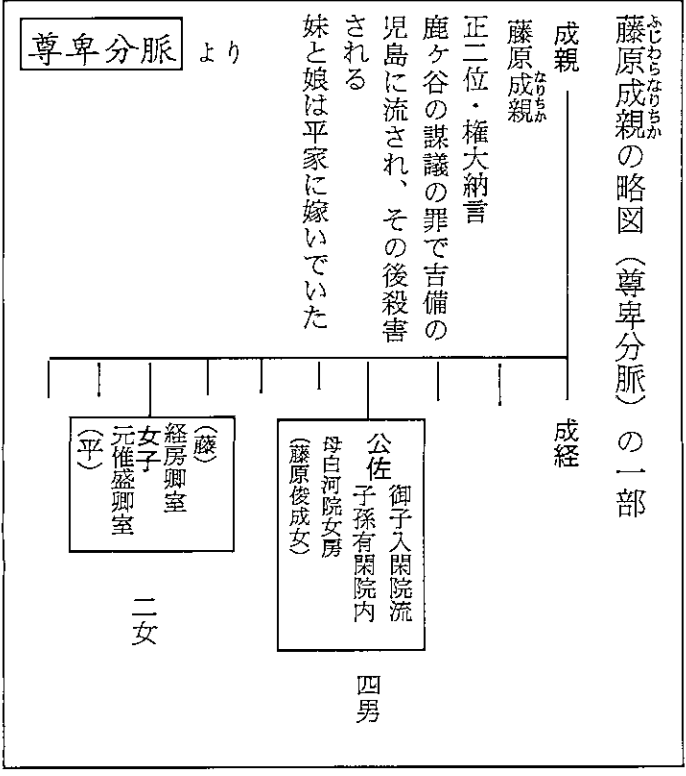
『建寿御前日記(別名 たまきはる)』—建寿御前(藤原俊成の娘、藤原定家の姉)は、建春門院(後白河后)に仕えていた—
 「女房の名よせ」、自分と同時代に内侍司に仕えていた数十人のことを記録している

「新大納言殿 平家維盛の妻 成親大納言別当といひしむすめ この京極殿の腹也十二三にて召されて 二三年ぞさぶらはれし 御所ちかきつばね給はりて かぎりなくもてなさせ給ひき」(新大納言という女房がいて、彼女は平家維盛の妻で、藤原成親の娘で、私の姉の京極殿が生んだ、だからこの女性は自分の姪。十二三才から二三年宮中に仕えた、帝と后のお側ちかくに局をいたただき、とたも可愛がらた)



藤原成親の娘は、宮廷では、「新大納言殿」と呼ばれていた。平維盛と結婚して「維盛北の方」と言われる。父親と夫が亡くなった平家の船上では「源のすけ」と呼ばれた。

「源のすけ」と呼ばれたわけは 兄弟の公佐が閑院流を継いだ。閑院流藤原氏は、崇徳天皇誕生によって臣籍に降下された源有仁の家系で、彼等は「源」とよばれていた。



安養寺にある成親供養塔
倉敷浅原安養寺は、福山を中心にかつては数十の堂宇が並んでいた大寺、安養寺はその本堂。成親は、安養寺の僧によって、受戒出家した。
(源平盛衰記)